

題名『郊外』

作 工藤昭太郎(クドウシヨウタロウ)

プロローグ

友人がカツアゲにあったらしい。

『カツアゲ』と云うのは、見ず知らずの人や稀に知人などから恫喝され、金銭を要求される行為である。つまり犯罪行為なのだ、故に人目に付く場所では殆ど行われる事が無く、どちらかと云うと人気のない物騒な雰囲気を醸したところで行われるのが常である。

ところが人気のない所と云うのは、つまり人がいないので、カツアゲをする方も、餌になる虫が飛んでこない処に呑気に蜘蛛の巣を張って、一日中獲物を待つようなことはしない。では、どのような所が最適かと云うと、駅の近くの人が多く行き来する場所から少し外れた裏路地やビルの間隙などで、そう云う場所は人の往来がある繁華街の中にはだいたい点状する。

そしてこれ、重複するが犯罪行為なので、カツアゲをする側としては、カツアゲ行為をした後は速やかに逃走しなければカツアゲ成功には至らない。そういう訳で行為の後に人ごみに紛れることができる繁華街は好条件が揃っているのである。

友人は、駐輪場でカツアゲにあったらしい。

この駐輪場と云うのは、駅から100mも離れない地元では有名な商業ビルの地下であり、800台ほどの自転車を収容できる有料の駐輪場なのである。

地下にある、と云うのがポイントで、朝の通勤通学の時間帯を除けば、そんなに人が行き来することも無く、夜も遅い時間になるとビルで商売するテナントも閉店し、程よく『物騒な雰囲気』を醸すこともある。

ところで、この商業ビルは少しユニークな造りになっている。敷地面積600平方メートルの中は2棟の建屋に分かれていて、それぞれ5階建ての二棟を隔てるように幅10m程のアーケードがど真ん中、北西から南東に約300m真つすぐに抜けている。

建屋の色は白を基調としていて、外周をグルリと囲った歩道もアーケードになっているのだが、全面アーチ状の柱で構築されたそれはモロッコのカサブランカ、はたまたイーグルスのホテルカルフォルニアのジャケットのような・・・ちょっと言い過ぎてる節はあるが、都心から電車で一時間以内とはいえ、ベットタウンと称される郊外には充分ハイカラな建物だったと思う。

おまけに、そのビルには映画館もあり、古着屋や楽器屋、中古レコード店も入っていたので、若者たちを魅了する要素が十分に揃っていた。

そもそも、このビルを立ち上げた人物は「渋谷の街を街ごと劇場にしまおう」などと云う野心に燃え、実際にそれを成し遂げてしまった鉄道会社の一族で、この郊外に渋谷のビルと同じ名前のビルがオープンした当初は、街のシンボルと云っても過言ではないくらい

市民の期待を満足させる商業施設であった。

しかしそんな街のシンボルも創業から四十年経ち、二〇二四年、時代のニーズに伴って閉店することになった。

セックスピストルズ

一九八九年、ロウタはエレキギターを背負っていた。

駅からすぐの商業ビルのアーケードを抜けた所に、楽器演奏に特化した練習スタジオがあり、そこへ毎週パンクバンドの練習をするために通っていた。

町工場を経営していたロウタの父は、高校卒業と同時に仕事に就いたこともあり、自身の学歴に負い目があったので、大学くらいは行けと口酸っぱく言うのだったが、当時のロウタ本人は目先の快楽ばかりに夢中になるものだから、勉強をしないので、大学受験をしたものの、どこにも引っかからず、高校を卒

業し浪人という立場になった。しかし結局は浪人になっても、勉強に時間を割く意欲は無かった。そのくせ、勉強の息抜きと嘘をつき、ギターを抱えて毎週スタジオに向かうのだった。

ロウタは小粋で少し尖った性格の祖母と住んでいた。そしてロウタは幼少の頃から、その祖母の横でテレビで放送している洋画を観るのが好きだった。特に祖母はアメリカン・ニューシネマが好きで、ポール・ニューマンやダスティン・ホフマン、デニス・ホッパー等の映画でのやり取りを幼少のころから横で

一緒に観ているうちに、当時のアメリカ映画のアウトローな部分に感化されてしまった。

そんな初期衝動を引きずりながら、中学、高校とやり過ごしていたものだから、進学をして専門的な知識を身に付け資格などを取得したり、大学で人脈を作って人生の選択肢を広げることに、果たしてそれが幸福なのか否か、具体的な想像が出来なかった。と云うよりそんな人生を否定した。それより、したためた文言を叫び、ライブハウスのステージを走り回っている方が手っ取り早くリアルに生きがいを感じた。

ロウタの母親はそんなロウタの性格を見通しているので、大学に入ればいくらでもバンド活動ができるのではないかと説教をするのだけど、当の本人はよくよくコツコツ勉強をするのが嫌い、というより出来ないもので、三月に高校を卒業してから、その年の夏が終わる頃には、「わざわざ金を払って大学まで行って勉強するのは馬鹿らしい」などと父親に啖呵を切ったものだから、普段は穏やかな父親が初めて激怒し、ロウタの髪の毛を鷲掴みにして「お前は家族から破門だ」と言い放った。

取り敢えずギターケースを掴んで家を出たものの、こんなことで友人を頼るのもカッコが付かないので、行き場を失ったロウタは何となくいつものアーケードに来ていた。父親を怒らせてしまったことに後ろめたさはあったが、自分の無力を嫌なほど痛感しているので成す術が思いつかず、只々虚しさを紛らわそうと、アーケードを見下ろせる二階のテラスのベンチに腰掛け、ギターケースから文庫を取り出し活字を眺めた。いつもギターケースに忍ばせているのは坂口安吾の随筆集で、ページを捲るだけで自分の語彙力の無さと、アイデン

ティティの軽薄さを埋め合わせてくれるような錯覚があり、悦になれた。

ロウタが安吾に没頭したのは、社会常識に対して独自の論調でカウンターを決めるところで、セックスピストルズを初めて聴いたときの感覚を思い起こしたからなのだが、果たして文学としてどこまで解釈できたかというのはどうでも良かった。つまりそれはファッションに対する造詣など微塵も無いのに、高額な有名ブランドのスーツを着込んで根拠のない優越感を獲得するのと一緒だった。

どれくらいそうしていたらどうか、気付くとビルのテナントは閉店していて、アーケードは人通りもまばらになっていた。300m程のアーケードの中頃で十代の若者たちが数人集まり、ラジオカセットを地面に置きヒップホップを流している。そのうち一人がアクロバティックなブレイクダンスを始めた。

アーケードの壁は殆どがガラス張りで出来ていて、その建屋に入っているテナントが閉店し店内の照明が無くなると、そのガラス張りの部分が鏡のようになる。その鏡の効果を利用し、各々の動作を確認してダンスの練習をしているのだ。店舗が終わっているとはいえず自転車や歩行者の通行人がいるので、それを邪魔しないように彼らはガラスに向かってステップを踏んだり、地面でクルクル回転したりしていた。ロウタにとって同じ趣味に没頭する仲間たちの姿は微笑ましくもあり、羨ましかった。

ロウタはバンドを組んでギターを弾いていたがあまり上手では無かった。この頃はいかに早く手数を多く正確に演奏するギタリストがモテはやされた。だから流行りの曲には速弾きをひけらかす楽曲が多かったのだが、「あんなものは競技みたいなもので、ロックの本質じゃない」とか何とか理屈をこねて、ロウタはそういう音楽をバカにしていた。本当のところは自分が速弾きを出来なかった事へのひがみなのだ。自分が出来ないことについては否定してしまえばいい。そうすれば自己嫌悪と向かい合わずにやり過ごすことができる。大受験と同じである。いつでも目的は明確なのだ、ただそこへ向かう為の目標設定と、その目標を達成するための努力が出来ないのだ。

バンドのメンバーには元々ギターを上手に弾きこなす者が他に居たので、正式なメンバーというよりもチョットした手伝い、と云うより、少し見栄えが良いところと、突飛なパフォーマンスがウケるので、そこを買われてマスコットとして参加していたようなものだ。

このバンドのリーダーはボーカルのマナブでロウタの三つ年上の二十二歳、いつも真っ赤に染めた髪をスプレーで立たせて鋸の沢山ついた革ジャンを夏冬関係なく着ていた。ロウタと彼が知り合った切っ掛けは、ロウタが友人に誘われてマナブのライブを観に行ったときの事で、興奮したロウタは全裸になりマナブのステージに上がり込んでピョンピョン飛び跳ねていたのだ。そんな奇行にマナブから興味を持たれ、ギターが弾けるならバンドに入らないかと誘われた。

マナブのパフォーマンスは派手ではないけど質禄があって説得力があった。ロウタはそこに本物を感じた。赤い髪をして革ジャンを着ている男がまともな仕事をしている訳はないだろうと勘ぐったが案の定、恋人に貢いでもらって生活をしていた。そんな事もロウタに

とっては魅力に感じられ、ロウタはマナブに男惚れしていた。

そんなバンド活動だったが、半年ともたなかった。

マナブはそこそこ人気があり、ライブハウスに行くといつも、雑誌『宝島』から飛び出してきたような連中に囲まれていた。それがどうもロウタには馴染めなかったのだ。

ロウタは穴の開いた色褪せたジーンズに下駄をはいていた。髪はボサボサで、映画「タクシードライバー」の影響でミリタリージャケットを着ていた。

ラバーソールを履き、タイトなタータンチェックのパンツ、五千円は下らないだろうガゼの袖の長いシャツを着こなすような連中は明らかに身だしなみに金がかかっていて、ロウタはそんなところにちっぽけな劣等感を感じていたのだ。

「パンクスをなぞっているうちはパンクじゃねえよ、パンクを否定してこそパンクだろ」と、いつもの調子で理屈をこねるが、そんな態度は自分の居場所を狭くするだけだった。

それでも、ステージの上でギターのコードをかき鳴らして、叫んで走り回ることが目的だったので、最初のうちはある程度楽しかった。でも取り巻きとそりが合わないロウタは孤独を感じていた。

そして、父親に啖呵を切って家を出る数週間前、大学受験があるからバンドを続けられないとマナブに告げたのだ。

受験の息抜きにギターを弾くと嘘をついた

ロウタは、その時また情けない嘘をついた。

リッチー・ヘブンス

アーケードでダンスをしていた若者たちが、練習に飽きたのか地べたに座って楽しそうに喋っている。たまに大きい声で笑うと、まるでホール会場のように残響するが、すぐに賑わいの中に中和するので気にならない。

駅からすぐのそのアーケードは、そこを抜けると沢山の個人店が密集する飲み屋街になっていた。そんな立地条件もあり商業ビルが閉まった後も、梯子する酔っ払い、飲み屋に出勤する着飾った女性、大学生のグループ、ヤクザ、見回りの警官など、昼間とは違った夜の人種が通りを行き来する。

アコースティック・ギターのケースを持った男が、しゃがみこんで団らんしている若者たちの中に割って入り、胡坐をかいて座り込み声をかけた。

「君たちいつもここでダンスしてるの？」

ニッカポッカに草履、よれた長袖のケシャツと云ういで立ちの男は、いかにもトビ職風で、頭は短めの強い天然パーマで、眉毛は殆ど無く、ヤンキーのような、そんな風貌だからギターケースを持っているのが不釣り合いで人目を引いた。

座っていた若者たちははずけずけとした男に一瞬たじろいだだが、つぶらな瞳をした二十歳前後に見える男の馴れ馴れしさに愛嬌を感じ、すぐに受け入れた。

「ヒップホップはよく解んないけど君たちカッコいいね、俺も音楽好きなんだけどチョットやって良いかな？」と、男は喋りながら、若者たちの返答も待たず、手際よくギターをケ

ースから取り出して一回ジャランとコードを弾いた。そして気になる弦をサツと調律して、一つのコードを本人にしか解らない何かを確認するように入念にストロークし続けた。

その段取りに最初若者たちは唾然としたが、男の奏でるグルーブにすぐに魅了された。

アーケードの二階のテラスで黄昏れていたロウタはギターの音が鳴り響いた瞬間に気持ちを持って行かれた。

その演奏は、高校時代にレンタルビデオ屋で借りた「ウッドストック〜愛と平和と音楽の三日間」のオープニングを飾ったリッチー・ヘブンスのそれを彷彿させていた。

暫くすると通行人が数人足を止めて演奏を聴きだした。そのタイミングで男はギターのコードを展開して歌い出した。

「大きなのっほの古時計」は元々アメリカの民謡で、誰もが一度は歌ったことがある、というか授業で歌わされた曲で、馴染みのある歌だが、それを路上の弾き語りで、しかも16ビートで熱唱する人など見たことが無かったので新鮮だった。

気付くとロウタは人だかりの間を割って入り、歌っている男の目の前に同じように胡坐をかいて見入っていた。

その男の名前はリュウと云った。

数人の拍手と喝采の中、ロウタがニヤニヤとリュウを見つめていたら、リュウから話しかけてきた。

「お兄さんが持っているのエレキ？」

「あ、うん」

「バンドやってるの？いいなあー」

「いや、ついこないだ辞めちゃったんだ」

「なんかできる？チョットやってよ」

「あー、じゃあそのギター借りていい？」

リュウはニコニコしながらロウタにギターを手渡した。ロウタは少し緊張しながらリュウのギターを手に取ると、パンパンに張られた弦に違和感を覚えつつ、リュウがそうした様に一つのコードを慎重にストロークした。周りの野次馬の期待を肌で感じる余裕が出て来たタイミングで、うろ覚えの映画『イージーライダー』で使われた、ポイントトゥービーワイルドを叫ぶように歌った。

昼過ぎ、ロウタが目覚めたのはリュウの六畳一間のアパートだった。

昨晚、アーケードで、高だか二〜三曲披露したら野次馬から五千円ほど御捻りを貰ってしまったものだから、リュウは興奮してすぐさま近くにあるコンビニで、その金を全て缶ビールとワンカップに替えた。そこからはすっかりどうしようもない路上宴会になってしまったのだ。ロウタはダンスの練習をしている

た若者の陣地を勝手に占領してしまったことに最初は躊躇したが、図々しいが愛想の良いリュウと、ただ酒が飲めることに歓喜したダンス少年たちは意気投合した。

昨日の日本酒のせいで乾いた喉と、ねばついた口内は不快だったが、家に帰りづらかった

ロウタにとって、転がり込めたリュウのアパートは救いだっただ。

屋下がり、昨晚買った乾きものの残り、空腹をごまかしながら二人は他愛のない話を続けた。だいたいはアレが好きだとかコレがカッコいいだとかの話だ。洋楽に詳しいロウタは、ここぞと知識をひけらかしてリュウを感心させた。対してリュウは童謡唱歌と吉田拓郎の素晴らしさについて熱く語るのだが、

ロウタにはそんな話が新鮮に聞こえたのだった。互いに共通していたのは二人とも当時の日本のポップスに殆ど興味が無かったことだった。

六畳一間に夕日が射してきた頃、昨日までの鬱屈をアーケードの興奮で上書きしたロウタは、一泊二日の家出を切り上げて実家に戻ることにした。

「来週もやろうぜ」

リュウが寂しそうに言った。

「おう、来週は俺もアコギ持ってくるよ」

そう言うってロウタはアパートを後にした。

大体の若者は、自尊心と承認欲求は高いけれど、その分羞恥心を殆ど持ち合わせて無い。故に人前で全裸になったり、道端で卑猥な歌を絶叫したりする奴がたまにいる。ただ、だからこそ新しい価値観を安易に受け入れたり、また創出することが出来るのも、若者の武器であり、特権でもある。

ロウタは高校時代からノートに言葉を書き留めていた。最初は周りにいた仲間がバイクに乗り出した頃に、バイクが欲しいバイクが欲しいと書きなぐっていた。毎晩自力で射精するのと同じように、他愛もない衝動を書き留めていたのだ。

二回目のアーケード集会でロウタはリュウに簡単な3コードを循環させ、自身の書き溜めた散文を叫んだ。

「双六を振れ！双六を振れ！お前の未来の双六を振れ！ゴールは地獄か天国か！双六を振れ！双六を振れ！」

「憂鬱な夜をぶっ飛ばせ、チンコとマンコで国境越えろ」

「ほらやってきた、夜と朝の間、時間を止めろワン・ツー・スリー」

どうでもいい言葉の羅列が意外とウケた。

先週出会ったダンス少年たちはダンススそっちのりで、待つてましたとばかりに喝采を浴びせた。また前回の路上飲みで仲良くなった三人組の女の子もやって来て、ベロベロになりながらロウタの言葉を追隨した。

そんなことをしているうちに、路上のパーティーは益々盛り上がってきた。

それからは毎週末アーケードに集まるのが暗黙の約束になり、特にリュウは日が暮れる頃に真っ先に来てギターを弾いていた。夜も深まると酔っ払いの通行人が多くなり、御捻りが入りだす。そして、それをその都度コンビ二で酒に替え、ギャラリーに振舞った。するとギャラリーは、酒を飲んでいるうちはそこに居着くので、サクラの役割になって、また人が集まる。終電前は書き入れ時で、客を送るホステスや、気前のいい酔っ払いがポンポンとギ

ターケースに投げ銭を入れていく。それをまたせつせと酒やつまみに替えていった。当時はハイブランドのスーツを着込んでデイスコへ行ったり、クリスマス前の半年前に高級レストランの予約が埋まるような、金持ちが目立つ時代だったので、汚い恰好をした若者が路上で弾き語るなんてのは珍しい光景だった。

そんなロウタたちの演奏に、学生運動やフォークブームを経験してきた団塊の世代と呼ばれる人達が足を止めることもよくあり、そうするとロウタは持ち前の雑学をひけらかし、そういった連中も虜にしていった。

## インディゴガールズ

サトミは商業施設のレコード屋で働いていた。高校を卒業して何もすることが無く、その時夢中になっていたロックバンドの影響でギターを少しかじっていた。共通の趣味を持ったマリエという友達がいて、バンド組もうとしていたが、他にメンバーが揃わず、ライブの予定が立つほど熱心な活動はしていなかったし、どちらかというところ、そのマリエと毎週スタジオで楽器を適当に鳴らしながら、酒を持ち込んでベロベロになるのが目的だった。

その日も仕事の後に、マリエと二人でスタジオに入って練習した後に、二人は近くの公園に行きベンチを陣取り、仕事や男の愚痴をつまみに、ウイスキーをボトルのまま回し飲みしていた。そして、これが二人にとっての大事な時間だった。

サトミはその時、一人の女性の視線を感じた。その女性は少し離れた所で立ち尽くしながらニコニコしてサトミたちを見ている。目じりは下がって微笑にも見えるのだが、何か様子がおかしい。髪の毛は何日も洗っていないようなベタつとしたロングで、着ている服もこれといった特徴は無く地味で、何か薄汚れていて異様な雰囲気を持っていた。その汚さから年齢は全く解らず、二十代と言われればそう見えなくてもないが、四十代と言われればそんな気もする。

酔っぱらったマリエが興味本位で彼女に声をかけた。ゆっくり二人に近づいてきた彼女は何か喋ろうとしているのだが言葉になっていない。そしてポロポロと涙を流し出した。益々異常な空気を感じたサトミは取り敢えず彼女をベンチに座らせて、名前だけは訊き出すことができた。

サトミとマリエは二人の好きな音楽の影響で、アジア雑貨店で売っている絞り染めのシャツを着たり、六〇年代のヒッピーのようなスタイルを好んでいた。二人とも髪は短めで小柄、あどけない顔つきをしているが、男勝りで風来坊を気取るところもあり、当時の一般的な女のコとはズレていた。そんなキャラ

だから高飛車にナンパしてくる今どきの男なんかを平気で蹴散らすような強気な一面を見せる。ただ二人ともある種の少数派を自覚しているので、同じように孤独を感じさせる人や、社会的弱者には優しさを見せた。

涙を流し続ける女性はアケミと名乗った。

取り敢えずサトミとマリエはどうにもならないアケミを駅まで送ることにした。

公園から駅までの途中、サトミが働いているレコード屋が入っている商業ビルのアーケードを歩いていると、アコースティック・ギターの音が聴こえてきたので、三人は自然と音の鳴る方へ近づいていった。

リュウは吉田拓郎の「高円寺」という曲を自分流にアレンジして歌っていた。ロウタはその周りを練り歩きながら空になったビールの缶を両手に持ちガシャガシャとぶつけてリズムを取っていた。ロウタはその曲を知らなかったが、即興でスキヤットを入れたり、しつちやかめっちゃかに暴れていた。

サトミとマリエは足を止めて眺めていたが、酔っぱらったマリエがイエイ！と歓声を発してリズムを取り出した。サトミも追いかけた。

そして気づけばアケミもまたニヤニヤと笑顔になっている。

ロウタは風変わりな三人組と、そのマリエが持っているウイスキーのボトルが気になった。

「ジャックダニエルじゃん、いいなあ、ひと口ちょうだい」

ロウタはマリエに話しかけた。

「いいよ」

そう言うともマリエはロウタにボトルを手渡した。

運命なんて言葉は大げさに聞こえるけど、いつもその辺に転がっている。音楽と酒と「イエイ！」があれば、それだけで十分なのだ。

何の仕事をしているようだが、どれだけ歳が離れていようが、男でも女でも、どちらでなくても構わない。例えばピーマンが食べれなくなったら、「イエイ！」があれば、それが運命の始まりだ。

ボブデイルン

夏の終わりから週末のアーケードへ通うようになって二カ月も経つと、冬も近づき肌寒くなってきた。相変わらず路上の宴会は繰り返されたが、たまにトラブルもあった。

ある時、いつにもなく派手に盛り上がっていたら、二人組の警察官がやってきて、近隣からクレームがあったので楽器演奏をやめろと注意された。ロウタはテナントが閉まっている夜のアーケードに住民なんかいるわけないし、誰がクレームしているのか教えてくれよと、警官に噛みついたが無駄だった。抑々街を散らかしている罪悪感の隅に置いておいて誤魔化していたので、警官に理屈を捏ねただけ虚しさが残った。

ある時は目の前でヤクザ同士の喧嘩が始まって、血まみれになってひっくり返っているのを見て興ざめたこともあった。暴力と云えば、リュウも短気な人間で、人から偉そうに説教されるとすぐにキレた。というか、ロウタから見れば何でもないやり取りなのだが、相手がネクタイをしているだけで「偉そうだ」と態度を変える。別に見下されている訳でもないのに、そんな人が「君たちさあ」何て、ちよつとでも意見をしようものなら、すぐに火がついてしまう。そんなリュウの行動を仲裁できるのはロウタだけなのだが、他人の暴力には

辟易する癖にロウタこそ心の中に暴力を宿していた。

一度だけこんな事があった。ギターを弾いているロウタにしつこく絡んでくる酔った男がいた。ロウタはそれを許容したが、その男がサトミたちに絡みだした時、ロウタはギターを置き、その男のみぞおちに蹴りを入れ、倒れた男の顔を何度も執拗に踏みつけたのだ。その時はリュウが止めに入れたのだが、止めてくれなければ取り返しのつかない事件になっていた。いつもはリュウの短気を諭すロウタが、この時はリュウに呆れられた。

問題は行った暴力行為の最中のロウタの精神状態だ。仲間を侮辱されたことが暴力の切っ掛けだったが、エスカレートする暴力の最中に怒りは無かった。例えるならば砂浜に丁寧な作られた砂の城を踏み潰す感じ、それに酷似した興奮に支配されながら男の顔を踏み潰していた。そしてそれは全裸でステージの上で暴れた後と同様に、その後、自分の反社会性に自己嫌悪するのだった。

どんな場所でも空気を一変できるリュウのパフォーマンスにロウタは憧れていて、どんな状況でも何とか納めてしまうロウタのスキルをリュウは尊敬していた。だからこそお互いすれ違って言い争いになっても、暴力に発展することは無かった。それともう一つの喧嘩にならない理由は、ロウタもリュウもそれぞれが内に秘めている自身の暴力性にウンザリしていたのだ。

冬が訪れ、気温が下がるのに比例してロウタの衝動も冷めていった。逆にリュウは何とか打開してもう一つ上のステージに這い上がろうともがいていた。そんな二人は次第に距離が開いて、ロウタはアーケードに足を運ぶ回数が減っていった。

本格的な冬になりアーケードにクリスマスマスの電飾が施されると、その華やかさとは裏腹に、寒い中二人の演奏に足を止める人も減ってきた。

そんなとき久しぶりにサトミとマリエがやってきて、一緒につるんでいたアケミさんが亡くなった噂をしていた。彼女が抱えていた鬱病がどうにもならなくて、マンションから飛び降りたという事だった。

ロウタはその日から週末のアーケードに行かなくなった。

年が明け数カ月が過ぎたころ、リュウから電話があった。そこでロウタは都心のライブハウスへの出演を持ち掛けられた。リュウはロウタと会わない間に弾き語りが出るライブハウスのオーディションを受けて、定期的に出演していたのだ。

「ロウタ、おまえミッチ子さん知ってるか？」

「ミッチさんって、有名なバンクバンドのミッチ子さんか？」

「今度ミッチさんの前座をやることになったんだよ！」

電話口でリュウが興奮しているのが伝わる。

「え、ミッチさんバンドはどうしたの？」

「今バンドを休止して弾き語りをやり出したらしいんだけど、それで話が来たのよ」

「それ凄いな」

「それでさ、前みたいに二人でやってたやつやろうぜ」

ロウタは一瞬迷ったが、久々に声を聞いたリュウがあまりにも電話口ではしゃいでいるので、それが嬉しかった。

「解った、やろう」

実はロウタはライブハウスには少し違和感があった。出演者に一五〇〇円のチケットを二〇枚買い取らせて30分演奏したら、その後その店主から理由の分からない説教をされる。これは暴走族が先輩からステッカーやディスコのパーティー券を押しつけられるのと同じシステムだ。いや、説教されないだけ暴走族の方がましだ。

だがロウタにとってミッチさんの前座が出来るというのは並々ならない興味があった。

少し前までロウタが参加していたバンクバンドのマナブからは、ミッチさんの伝説を散々聞かされてきた。全裸になって最前列の女性の客の顔に自分の股間を押し付けたり、豚の内臓を客席に投げ投げたり、それはもう滅茶苦茶な話ばかりで圧倒されていた。

久々に揃ったロウタとリュウはスポットライトが当たる薄暗いライブハウスのステージでもアーケードの時と同じだった。ロウタは動物の声を真似たりしながら、自作のおとぎ話をリュウのギターに載せて朗々と語りだし、間髪入れず3コードでトキングブルース、最後は北原白秋の『この道』で締めた。路上で知り合った仲間が何人か遊びに来てくれたこともあり、良い空気を作って前座を終えたことに満足していた。

そしてミッチさんの弾き語りは素晴らしかった。一曲目がボブデイルンのカバーだったのには面食らった。そこに居るのは紛れもないパンクの王様なのだが、ロウタは彼の歌からその選曲に必然を感じた。かつては轟音鳴り響くバンド演奏の中、皮肉骨髄な言葉を矢継ぎ早にぶちまけていたミッチさんだったが、ギター一本の弾き語りは、まるでロードムービーを観ているようだった。

最後に歌ったアリゾナの砂漠を旅する歌は、ロウタとリュウの心に大きな杭を打ち込んだ。

ニルソン

その夜ライブハウスの帰り道、リュウはロウタに「アリゾナってどこにあるんだ？」と訊いてきた。ロウタはジム・モリソンの伝記を読んでいたのでアリゾナの場所を何となく説明することが出来た。二人とも自分たちの演奏の達成感と、ミッチさんの佇まいに圧倒された余韻で胸がいっぱいになっていて、殆ど会話をしなかった。それぞれの家へ向かう分岐でロウタはリュウに「またな」と別れを告げた。リュウは一言「じゃあな」と言って違う方向へ歩いて行った。

何となくそれが一つの始まりの合図でもあり、また一幕のエンディングでもあることを予感した。

その日から数日後ロウタはリュウの家に電話をしたが、電話は解約されていて繋がらなくなっていた。

それから半年も経ったころ、ロウタは久しぶりに商業施設に行き、レイトショーで再上映

された古い映画を観ていた。市場で盗んだココナツをアパートの窓から落としてしまい落胆したダスティン・ホフマン演じるラッツオ、伊達男のジョン・ボイド演じるジョー、二人は冬のニューヨークに別れを告げマイアミに向うバスに乗り込む。殆ど機能しなくなった身体をシートに預け、朦朧のラッツオは不調とは裏腹に希望を抱く。

その先が天国なのか、はたまた繰り返される地獄なのか、そんなことはたいした問題ではない。ただ心の中でサイコロを振ることが重要なのだ。そして二人を乗せたバスは走り出す。長い夜のトンネルを抜けたところ、ラッツオは皮肉にもヤシの木の柄のアロハを着ている。そして彼はマイアミの砂浜を踏むことなくバスの中、相棒のジョーの横で永遠の眠につく。

ロウタは涙を滲ませ、数人しかいない周りの客に聞こえないように微笑みながら「やったな」とつぶやいた。死は人生の終着であり悲しい別れではあるが、ラッツオにとっては社会の柵からの解放だった。そう、それはロウタにとって美しいエンディングだった。

人気のない映画館を出て、テーマ曲の『うわさの男』の余韻に浸りながら二階のテラスに向かった。

平日の夜、テナントの営業は全て終了し、アーケードを歩き来する人は疎らだ。もうじき夏だというのに、リュウのギターが彩ったあの時の路上の空気は幻の如く喪失していた。

ロウタは一枚の絵ハガキをジーンズのポケットから取り出して眺めた。カルフォルニアの砂浜の写真が印刷された絵ハガキ、投函された住所はサンディエゴと書いてある。そして「ロウタ元気か、こっちは凄いで、お前も早く来い」とぶっきら棒に一言書かれていた。リュウからのハガキだ。

ロウタはハガキをポケットにしまい、テラスの端からアーケードを見下ろす形で伸びている50センチほどの幅の梁を慎重に渡り、3mも進んだところからアングルで構築されたアーチを5m位よじ登り、透明の分厚い樹脂でできたテラスの天井のフレームに上がった。そして東の空を見上げて

「この空のむこうにアメリカがあるのか」

と小さく独り言をした。

そして一つ深呼吸をした。

それは覚悟を決めるスイッチだった。

エピローグ

二〇二三年、時代もすっかり変わり、商業ビルも来年で40周年を迎える。そして老朽化を理由に取り壊されることが決まった。

ビルは建屋の老朽化とは逆行して、いらぬものが色々と増設されていた。その一つが監視カメラで、注意深く見渡せば何台ものカメラが設置されている。お陰でカッアゲをしようなどと割の合わないことをする連中などは全くいなくなった。

こう云った商業施設がボコボコと春の筍のように、郊外の主要な場所に立ち上がった80年代、それまでマニアやコレクターと呼ばれていた人種がオタクと呼ばれ、暫くしてそれ

らが商材として注目され、ポップカルチャーとして市民権を獲得したとき、今でいうサブカルチャーと云うパッケージが出来たのだ。

つまりマジョリテイとマイノリティの垣根がなくなる夜明けが1990年である。その昔ロックに傾倒する若者は多かれ少なかれ自分がマイノリティであることを自覚していた。しかし80年代中盤から沸き上がったバンドブームという商売としての成功事例が、その垣根を取っ払ったのだ。

そう、それらのちっぽけな文明開化を起動させる材料がこの商業施設には全て揃っていた。そしてアーケードは、時に、その創作意欲をぶち撒き表現するためのキャンバスであり、ステージであった。商人は商人の衣装を身に纏い、学生は学生らしく、ヤクザはヤクザで、水商売、サラリーマンと、ステージの上に立つキャストは明確だった。皆各々の役割を演じてドラマを展開していたのだ。

現在に於いては、そのリアルなステージや文明開化に必要な材料を手に入れることは、インターネットの中で殆ど用を足してしまう。

それらの需要が減ってしまったことを考えると、建屋を取り壊してマンションになるだろう現実には、虚しさを感じつつも抗えない。ただ溜息を一つ付いて、現実を受け入れる自分がある。だからこそ思い出を活字にして残しなかった。

自分の青春を回想しながらこの文章を書いている時、ふとあの頃のこと懐かしくなり、30年ぶりに建屋の天井が上がってみようと試みたが、深夜テラスから梁へ上がれる場所まで行ったら、自動音声で警告された。思い出は思い出のまま大事にしまっておけという戒めか、はたまた年甲斐もなく無茶をしようとした自分を諭された感じがして、苦笑いがこぼれ、その場を静かに立ち去った。

あの頃アーケードで知り合った仲間たちは、ごく数名を除いて殆どの消息が不明だ。そしてこの話は決して自分だけの事ではなく、都心から外れた同様な場所でも同じような物語が無数に展開していただろう。そういう理由から、この物語では敢えてビル具体的な名称を使わず「商業施設」とすることにした。

今回この文章を書く切っ掛けを、自分に課せられた一つの運命として捉えるならば、あの時代を知る者たちへ、この物語が届くことを願う